

学校英語教育が育てる「傾きの精神構造」と 今後の学校教育

大 野 厚 子

はじめに

私が英語を学び始めて今日に至るまでに英語が広げてくれた世界は果てしなく、世界の色々な文化の国の人たちとの交流や異文化の理解に導いてくれただけではなく、私の国、日本の文化に対しても目を開かせてくれた。しかし、アメリカ留学をする前の私はどちらかというと西洋志向に偏っており、日本の文化にあまり関心がなかった。その私がアメリカでの生活を始めると、自分自身が日本人であることを強く意識するようになっただけではなく、よく知っているつもりだったアメリカの文化について実際は何も分かっていなかったということに気付かされるさまざまな事に直面した。最初はあまりの違いに驚くことの連続であり、ひどいカルチャーショックに陥ったほどである。

アメリカ生活を通して段々分かってきたことは、アメリカと日本がほぼ正反対の文化を持っている国であるということである。日本人が価値を置くようなことにアメリカ人はまったく価値を置かないということが日常茶飯事であった。しかし、アメリカ人とのコミュニケーションを英語でする限りは、英語の背景にあるアメリカ文化というものを無視すればコミュニケーションが成り立たないと言うことを痛感した。つまり、言語と文化は表裏一体のものであり、言語を学ぶことはその国の文化を学ぶということでもあるということをも身を持って体験したのである。しかし、同時に、アメリカ文化を容易に受け入れられない自分の中の葛藤をしばしば見て、今まで西洋志向と思ってきた自分の中には日本文化を背景にする思考が潜在していることを強く意識するようになった。

アメリカでの生活を通して、他の文化を理解し受け入れ敬意をもつことの大切さと同時に、昔から日本人が受け継いできた精神性や文化のすばらしさを今一度認識し、それを身に付け伝えていくことの大切さを痛感した。そして、日本語や日本文化を軽視してきた自分を心より恥ずかしく思うようになった。アメリカという異文化の中での葛藤を通して気付いたことは、英語を勉強することイコールアメリカ人のような考え方、振る舞いをするような日本人になるということではなく、逆に、英語という言語の背景にある文化を学び理解することで、大きく視野が広がると同時に、自分自身や日本文化を客観視することができ、自分の文化や言語をより理解し誇りに思えるような外国語の学び方が大切であるということであった。

アメリカという日本の外にある、しかも全く違う文化をもっている国から日本を見た時、日

本が日本の文化を軽視し、アメリカのようになろうとしている方向性がよく見えるようになり、危機感に似たものを感じるようになった。そして、英語教師として英語教育に携わっている今、その方向性に拍車をかけているのが現在の日本の学校英語教育ではないかと思うようになった。つまり、日本人が国際語である英語をあまりにも重要視するため、英語や英語の背景にある文化が過大評価されるようになり、日本人が英語ができるようになればなるほど日本語や日本文化を蔑視するようになったり、自分自身や他の日本人を英語力で評価したり、アメリカに憧れをもち日本を誇りに思えない人を増大させたりするような英語教育の傾向に一抹の懸念を抱くようになったのだ。また、その傾向を助長するかのように、いたるところで日本語の中に英語の言葉が使われるようになり、「日本語より英語の方が優れている言語である」と知らず知らずのうちに思い込み易い状況に置かれているということに日本国民は気づいているのだろうかと思った。そして、それまで疑問にも思わなかったことだが、日本人が自分の言語であるにもかかわらず、日常生活の言葉の中に分からない英単語が多く出てくるといった状態は異常であることに気がついた。英語を習ったことのない人、英語をもう忘れてしまった人、英語をあまりまじめに勉強しなかった人などには住みにくい国になりつつある。学校英語教育においても、青少年たちはこのような傾向の中で教えられ、偏った語学習得の仕方をしていることが見えてきた。本稿ではまず、アメリカ文化と日本文化の違いを検証し、学校英語教育が英語を通していかに生徒を「偏った精神構造」に育てているか、また、今後の日本の学校教育がどうあるべきかを論じたいと思う。

1. アメリカ文化と日本文化の違い

学校英語教育について述べる前に、まず、アメリカ文化と日本文化を比較し、英語がいかに日本文化と違った背景の文化を持っている言語であるかを見ていき、その違いを理解することで、英語をただ“崇拜”することの危険性を検証してみたいと思う。

1. 「開拓志向」と「自然志向」

アメリカ人は大陸に渡ってきた時の精神である「開拓精神」を文化の中の根本に持っており、行動や価値観に多くの影響を与えていると思う。松本青也氏が、「日米文化の特質」の中で、「アメリカ文化には主体的に流れを変えようとする人為志向がある。新大陸に渡り、自然に手を加える大開拓によって新しい国家を築いたアメリカ人は、計画的に働きさえすれば、自然でも社会でも、必ず良いものにする事ができるというアメリカン・ドリームを持っている」と述べているように、物事や状況を積極的に変えていこうとする傾向がある。この開拓精神は人との交流の中でも発揮される。アメリカで驚いたことの一つは、アメリカ人が誰かと初めて会った時に、まるで何十年来の知り合いのように振る舞うことである。またパーティーなどでも誰彼となく積極的にどんどん人に話し掛け、自己紹介したり、いわゆる“small talk”（世間話）

をしたり、冗談を言ったり楽しそうに振る舞う。日本人のように雰囲気慣れるまでじっと様子を見て動きを考えたり、受身的に待っていたりということはない。また、アメリカでは、より良い仕事や高い地位を求めて職場を転々と変えるというのは珍しくなく、自分の職場に忠誠心を持ち、退職するまでそこで働くことを美德とする日本のような終身雇用の考えはない。逆に、職場を変えない人は、能力がないか向上心のない人と見なされる傾向があるほどであり、優秀な人ほど一生の間に何度も職場を変えるのが普通のものである。

一方、「日本文化には、自然の流れにまかそうとする自然志向がある。稲作の長い歴史を持つ日本人は、いくら急いでもなるようにしかならず、と考える。自然を生かすことが大切で、あるがままのすべてが、等しく神なのである」と松本氏が説明している様に、アメリカ人のように、知らない人の雰囲気の中にすぐに溶け込もうとすることや、雰囲気を積極的に作っていくということを日本人はあまりしない。そういう行為は、日本人にとっては大変なエネルギーを要するものであるだけでなく、不自然な振る舞いのように思えるものである。知らないもの同士が集まった時に、アメリカ人は初めから積極的に雰囲気を作ったり変えたりしようとするが、日本人は反対に、段々雰囲気ができていくのを待つ。当然、打ち解けるまでは時間がかかる。春が来てジワッと雪が解けるのを待つように、自然に任せるところがあり、アメリカ人のように春が来る前に氷を割ろうとはしない（ちなみに、「座を打ち解けさせる」ことを英語で“break the ice”「氷を割る」と言う）。また、職場にしても、日本人はより良い仕事や地位を求めて転々として積極的に自分の状況を変えるのを、本来、美德とは思わない。地道にコツコツ努力していれば、自然に段々良くなるという自然志向がある。

また、アメリカ人は理屈で動くところがある。自分で納得したものに対しては行動が早い。アメリカでは、タバコが体に悪いと言われ始めると、積極的にやめる方向にもっていった。多くの人がタバコをやめ始め、またたく間に公共の場での禁煙が広がり、タバコの宣伝や広告も禁止されるまでになったのである。レストランなどで自分の隣でタバコを吸っている人に対しても、「タバコを吸うのはやめていただけませんか」と吸わない権利を主張し、積極的に周りを変えようとする。一方、日本人は理屈はわかっている、今まで吸っていた人に突然やめてくださいと言うのは不自然で言いにくい。自然に変わるのを待つ。日本人は理屈には合っている、すぐに結果を求めない、時期を待つ傾向がある。

この文化の違いによって、アメリカ人と日本人の誤解が生まれるであろう。アメリカ人にとって、日本人は消極的で、内気で、社交下手な、おもしろみのない人で、行動力に欠ける人という風に写るであろうし、日本人にとって、アメリカ人は、不自然なやり方で強引に物事を変えようとし、自分の正しいと思うことを相手に押しつけ、周りの状況を変えようとする、長い目で物事を見ることができない人と思うかもしれない。

2. 「主張志向」と「調和志向」

アメリカ人が喧嘩をしているのではないかと思うほどの激しい議論しているのを聞いて驚く

ことがよくある。「アメリカ文化には相手と対立してでも自分を主張しようとする主張志向がある。異質なものが混在しているアメリカでは、常に回りに向かって自分の本音をはっきりさせることが大切である」と松本氏が説明しているように、アメリカはさまざまな違う文化から来た人たちの集まった国であるからか、誤解されないように相手に対する要求や自分の考えをはっきりと表現することを一番良いことと考える。もちろん、はっきり言うことが相手を傷つけるような場合はそれなりに言葉や表現を選んで使うが、意見が全然違う場合などに、言わないで後で誤解されたり、考えのない無能な人間と思われたりするよりは、相手と対立するほうを選ぶようである。子供も、早い時期から自我に目覚めるように育てられ、自分が何を考え、何をしたいかなどを表現する訓練ができていく。日本のように「以心伝心」というような考えはなく、自分の言いたいことをはっきり雄弁に語ることが高く評価され、逆に、自分の気持ちをはっきり表現できない人は落ちこぼれと見なされてしまい、社会的には不適当となってしまいうようである。それを矯正するために assertiveness training（自己主張訓練）などを受ける人までいるようだ。

一方、「日本文化には、相手や周りの人たちに合わせようとする調和志向がある。暖かい人間関係を保ちながら集団としてうまく機能しようとする日本人は、何よりも調和を重視する」（松本氏）日本では、相手に対して何を考え、何を求めているかをはっきり口にしたり、そのことを相手に尋ねたりすることは繊細さに欠け、品位がないとさえ見なされる。英国人陶芸家バーナード・リーチ氏が、「すべての日本文化の根底には神道がある」と言ったように、「万物に神のいのちが宿っている」という考え方が日本の文化の根底にはあるのではないかと思う。日本には、本来、アメリカのように自然を克服し開拓して自分たちに合わせていくという考え方はなく、自分を自然に合わせていくという文化が受け継がれてきた。春なら春に合わせて、冬なら冬に合わせて、自然を壊すことなく自分たちの生活を自然の流れに合わせていくという考え方が日本文化の根底にある。アメリカが自我に目覚める文化なら、日本文化は自我を捨てていく文化であり、周りの状況に自分を合わせていくという調和を美德とするところがある。自分が何を考え、何を求めているかの意識に目覚めるよりも、逆に、自分の周囲の人の気持ちや状況を察知し、それによって自分のとる行動を判断する訓練を小さい頃からさせられる。「一を聞いて、十を知る」ということを美德とし、言われてするのは下であると考え。アメリカ人は「一を聞いたら一しかしない」文化である。言われないことをどうしてできるのだと考えるのがアメリカ人である。日本人にとって、「言われたことしかやらない」人は人間として成熟レベルが低いということになる。

例えば、飲み物一つにしても、アメリカ人は自分が何を求めているかをはっきり相手に伝える。「お茶がいいですか。コーヒーがいいですか。ジュースも、紅茶もありますよ」と質問される場合が多いが、はっきり自分の要求を表さなければならない。相手に合わせるつもりで、「何でもいいです」というのでは答えにならない。アメリカでは、“No, thank you.”（結構です）と言えば何も出てこない。アメリカ人は言葉がその人の考えているすべてと取る場合が多

い。もし日本人のようにそれでも何か出せば、相手は自分の意思を無視されたと取り、良い心地はしないのである。

アメリカ人は、日本人のように、こうあるべき自分、つまり、努力目標としての自分と、現実の自分の違いを「建前」と「本音」で区別することはあまりない。つまり、「本音」を言う場合が多い。しかし、日本人であれば、「結構です」と相手が言っても、「まあ、いいじゃありませんか、お茶でも一杯どうぞ」と相手が受け入れやすいように飲み物を勧める。日本では、あまりはっきり口にするのは繊細さに欠け、品位がないこととされ、来客に対しても、いちいち何が欲しいかと聞かないでお茶やコーヒーを出し、客も出されたものを飲む。このように、相手に言われる前に察知して、その人の為に何かをすることや、また相手がしてくれたことを受け入れ「調和」していくことは日本では美德であるが、アメリカ人にとって、誰かが自分の求めていることを自分の為にするというのは、自分の意思を尊重していないと思い、かえって迷惑がることがよくある。日本人は、飲み物を要求する前に、そっと何か出されることに気配りを感じるが、アメリカ人は「何か飲み物はいかがですか」と自分の意志を聞かれずに何か出されることをあまり好まない。つまり、相手が自分の意思や要求に沿って何かをしてくれることを好むのである。

ここでも、文化の違いによる摩擦が起きるのであろう。日本人にとってのアメリカ人は、気持ちを言わなければ分からない察しの悪い人であり、自分の権利や考えばかりを主張する自己中心的で、わがままな、協調性のない人と映るかもしれない。また、アメリカ人にとって、日本人は、何を考えているかわかりにくく、自分の気持ちに正直ではない「ウソ」の多い、建前ばかりの国民であるかもしれない。

3. 「対等志向」と「謙遜志向」

もう一つ私が戸惑ったことは、アメリカで、私がホームステイをしていた時、その家のご両親が自分たちのことをファーストネームで呼んでほしいと言われたことである。それまでは私と同年代のアメリカ人との交流が多く、ファーストネームで呼ぶことには慣れてしたが、私の両親と同じ年代の方たちをファーストネームで呼ぶことには大変抵抗があった。知識があってもそれを実際に行動に移すことの難しさを感じたものである。しかし、「ファーストネームにしなければ、関係に距離を置こうとしているように思われる」と言われ、ファーストネームにしたが、慣れるのにしばらくかかった。

アメリカ人は、親しくなると、年とか地位とかには関係なくファーストネームで呼び合うことを好み、お互いが対等であろうとするようである。英語では、「先生」「お兄ちゃん」「お姉ちゃん」「先輩」「後輩」というような年上の人や、目上の人を呼ぶ言葉は使わない。年齢の差があっても、それを度外視して対等な立場を取ろうとする。縦の関係にある現実を無視して、努めて横の意識を持つことで、基本的には誰でも同等に尊敬されるべきであるということを表す。だから、自分を人より下に置くというような「謙譲の美德」というものはなく、自分が相

手に「へりくだって」謙遜の言い方や態度をするということはあまり見当たらない。日本人が自分について控えめに表現して相手を立てようとするのに反して、アメリカ人は自分についてあまり控えめに言ったり、自分の能力を控えめに表現したりすることはないばかりではなく、能力以上に言ったりすることもよくある。

一方、日本人は謙遜ということを美德とし、自分が「へりくだって」相手に対して「畏敬」の念を表すという文化がある。言葉の上で日本人が自分を人より下にする姿勢が端的に現れているのは敬語である。日本で日本の文化の中に浸っていると気がつかないが、日本人は日常の言葉の中に「申し上げます」「差し上げます」「いただきます」など謙譲の言葉を自然に使っているのである。敬語がないと日常生活が成り立たないほど、日本語そのものの中に日本文化が埋め込まれているのである。英語では、どんな人に対しても、“you”という代名詞が使えるが、日本語では、先生に対して「あなたは昨日どこへ行かれましたか」という言い方はしない。日本語の「あなた」という言葉には「対等な関係」であるという意味が含まれており、同等の人か、下の人にしかなれない言葉である。この場合は「あなた」という言葉はふさわしくなく、「先生」という敬意を表す名詞を使わなければならない。

留学中に、アメリカ人に日本語を教えたことがあるが、「私はピアノが大変上手です」というような文章を作る学生が多くいた。日本人は自分のことを「……が上手です」というような自分をほめることはあまり言わないと説明すると、「どうしてですか」と不思議がった。アメリカ人が、「(写真を見せながら)これ私の娘です、きれいでしょ」「息子は学校でよくできるんですよ」というように家族をほめるのをよく聞く。家族のことを言うのにも「へりくだる」日本人と違って、アメリカ人にとって家族もやはり対等であり、「へりくだって」話す対象ではない。日本人が家族のことを謙遜して言う言葉はアメリカ人には「家族の悪口」と聞こえるのである。日本人が「へりくだった」言葉を使う時は、お互いに相手が謙遜して言っていることがわかっており、言葉通りには取らないものであるが、アメリカ人は日本人が謙遜して話すとその言葉通りに受け取り、言葉の奥にある奥ゆかしさや、相手を立てる想いなどはほとんど理解できない。日本人にとって、「粗茶ですが」「つまらないものですが」「心ばかりのものですが」というような言葉は、日本文化の奥ゆかしさのある謙遜の表現であるが、アメリカ人にとってはこの言葉は不誠実であり、偽善であり、人間は対等であるべきだから「へりくだる」べきではないと言う。

II. 現在の学校英語教育が育てる「偏りの精神構造」

こうして日本とアメリカの文化の違いを見ていくにつれて、日本とアメリカがいかに文化的に相違点が多いかということがわかってきた。極端に言えば、価値観が正反対であるといっても過言ではない。英語教育に携わるものとして気をつけなければならないことは、日本人に英語を教えることによって、日本人の精神構造を偏ったものにしてはいけないということである。

英語の授業は、とかく、英語を母国語にする人たち、特にかっこいい金髪の白人を「崇拜」させるような授業になりがちであり、テープから流れてくる「完璧」な発音を真似し、テキストの中のアメリカ人が書いた「完璧」で「自然」な英文を目指さなければならない。彼らの発音や文章に近づけば近づくほど、ほめられ、無意識の中で、アメリカ人は目指すべき人たちとなる可能性がある。アメリカ人は、常に権威であり模範となる。英語の授業を受けるたびに、アメリカ人を仰ぎ見る、「傾いた精神構造」が強固になる。アメリカ人に比べれば、日本人である自分を取るに足りない、劣った人間なのであるという精神構造がますます確立されていく。

教師も同じである。今までは、教室の中では、英語のできる「崇拜」されていた存在だったにもかかわらず、AET（英語補助教師）が登場した為に、自分の英語教師としての立場が揺らぐ。AETは大学を卒業したてのただの若者で、日本人が日本語をしゃべることができるのと同様に、英語がべらべらというだけのことである。私たちが海外に行って中学校の日本語のクラスで日本語の教師のお手伝いをする程度のものであるが、生徒は教師の発音や英語力に対して疑問を持ち始める。教師の胸中は恥ずかしさと劣等感で一杯になる。英語をうまくしゃべれるだけで、その人を仰ぎ見てしまう、「偏った精神構造」を育ててしまった為に起きる悲劇である。実は、このことで劣等感にさいなまれる教師自身も、英語力によって自分自身を評価する、「偏った精神構造」を築き上げてきたのである。

AETが英語が上手なのは当たり前のことである。英語がしゃべれるのが偉いと思うのは間違いである。評価の対象にすべきことは、彼らの英語ではなく、今住んでいる国の言葉である日本語を一生懸命学ぼうという姿勢である。比べるなら、彼らの日本語と自分たちの英語を比べるべきであり、彼らの英語と自分たちの英語を比べるから間違いなのである。例えば、私が英語が全くできない状態でアメリカに何年も住み、日本語でアメリカ人に話しかけたとしたら、「日本語、分かりません。英語で話してください」といわれるだろう。何年もアメリカに住んでいるのに英語を覚えようとしなないというのは信じられないと思われるだろう。しかし日本では、日本に住んでいる外国人、特に英語圏の人たちは日本語を全く知らなくても、何も不自由することはなく、何年日本にいても日本語ができないことを恥ずかしいとも思わなくてもいい環境を与えられているのである。そればかりか、日本に来ている外国人と英語で話せないことを恥ずかしく思う日本人だけではなく、一生懸命日本語で話そうとする外国人に英語で受け答えをする日本人もいるのである。かつての私自身がその一人であったのでその心情はよく分かるが、やはり、日本人は日本語をもっと大切にすべきであり、次の世代にしっかりと受け継がせていくべきであると心から思う。

また、日本人は、日本に住んでいる外国人に日本語を話すことをもっと奨励するような態度を養い、テレビやラジオも英語教育番組と同じぐらいの数の外国人向け日本語教育番組を作成するべきではないかと思う。「お互いの言葉と文化を学び合おう」という姿勢を持ち、もっと日本人が、日本語や日本の文化に対して誇りを持つように養成する教育としていかなければ、英語教育によって日本人の精神構造は偏ったものになってしまうであろう。

天下のNHKも「スタジオパーク」,「クローズアップ現代」,「ニュース10(テン)」などの英語を番組の題名に使い,「農協」という言葉は日本人にとってこれほど分かりやすい短縮語はないにもかかわらず「JA」という意味不明の言葉に変えられてしまった。私は、決して、日本語の中に英語を取り入れることに反対しているのではなく、取り入れる理由に「偏った精神構造」があるのではないかと思うのである。今は、「英語は全然だめなんですよ」と言って笑って済ませるが、将来、日常生活の日本語の中に英語がもっと多く使われるようになり、英語の会話がいたるところで聞こえるようになり、英語で書いてあるものがあちこちで目に付くようになったら、笑って済ませることができただろうか。もし日本で、英語力が人を評価する物差しになり、日本語を見下し、極端な言い方をすると、日本の国民がいずれは英語をしゃべらなければいけない国になるとすると、日本人の国民性も日本の国も消滅する時が来るのではないかと懸念してしまう。なぜなら、日本語は日本人の思考、精神性そのものだからであり、英語の持っている思考法とは大きく違うのである。英語をうまくしゃべることは、その背後にある文化を身につけ、英語の発想でものを考え行動するということであり、価値観まで英語風になるということなのである。英語には「お陰様で」、「どうぞよろしく願います」、「先輩」、「いつもお世話になっております」、「いただきます」、「恩」などの日本語の発想や価値観はないのである。このような発想、価値観を変えないと英語がうまいとは言えないのである。

英語にあまりにも重きをおくため、幼稚園からすべて英語を使って教育すればいいと主張する人もいと聞かすが、松本青也氏が「それなら苦もなく覚えられるし、日本語は家庭で使うから大丈夫というわけだが、こうした外国語教育にはさまざまな問題が起きる。例えば、英語で学校教育を受けることで、英語が下手な親を尊敬できなくなるなど、家と学校での価値観や生活文化の対立と混乱に直面して、アイデンティティーや誇りを失ったり、母国語の発達が阻害されて成績不振に陥ったりすることは第三世界の多くの国が共通して抱えている課題である」と述べているように、英語を重要視する前に、日本人の思考の土台である日本語を重要視することが大事であり、「英語は日本人に成功と幸福をもたらす青い鳥」のような幻想からもう目を覚まさないといけない時期ではないかと真剣に思う。日本人は、国際人になる為には英語は不可欠とどこかで信じているが、本当の国際人には、英語圏だけではなく非英語圏のどんな人種の人たちとも偏見なく対等な立場で協調する態度がなくてはならない。今の日本人の若者たちの意識の中の国際社会とは、英語圏であり、「外人」とは、かっこいい金髪の白人ということ指しており、そうでない人は「外国人労働者」であり、警戒や軽蔑の対象となっている人たちである。マスコミもそれをあおるような番組作り、イメージ作りをする。自分自身の精神構造の中に、このような欧米人への卑屈な傾きと偏りを秘めていてどうして国際人になれるであろうか。

Ⅲ. 今後の学校教育

私は決して英語を勉強したり、習得したりすることを否定しているのではない。むしろ、ほかの国の文化に目を開かせてくれる外国語習得は奨励されるべきであると思う。願わくば、英語だけではなく、他の言語習得も奨励され、色々な文化を理解する日本人が増えたほうが良いのではないかとも思う。しかし、どの言語を学ぶにしても、その言語を学ぶことで、日本や日本語の土台になっている文化が軽視されたり、崩されたりするような教え方や、習得の仕方は避けなければならないと思う。つまり、外国語を学ぶことで、その背景にある文化を理解することができ、そのことで、自分の言語と文化をより深く理解でき、より良いものにする為の言語習得でなければいけないし、そういうことを目指した言語教育でなければならないと思うのである。英語教師としては、英語が作り出す、この「偏った精神構造」の危険性を常に頭に置きながら英語教育に携わっていくことが大事であると思う。そのためには、まずは、教師自身が、英語の背景にある文化の違いなどをしっかり認識して、自分自身の中の「傾きの精神構造」を取り除かなければならない。しかし、「取り除く」ことで、逆に、英語を母国語とする人たちへの敵対心や感情的な国粋主義に陥るような、新たな「傾きの精神構造」を育てることは避けなければならない。

今後、学校教育がまず、目指さなければならないものの一つは、日本人が何よりも日本語を思考の道具として使いこなすことを目標にし、日本の精神構造が英語などの他言語によって崩されることは避けなくてはならないと思う。「日本人は日常、日本語を話し、学校ではどの科目も日本語で学んでいるから、特別に『国語』という科目はいらない」、という日本の教育の方向性を聞くが、本当にそれで良いのかと疑問に思う。私は、逆に、日本語こそが言語教育の最重要科目であり、日本文化が埋め込まれている日本語をきちんと使うことができる日本人作りをすることが最優先されなければいけないと思う。また、今までは、日本語で「論理的な」文章が書けるような作文指導や、考えていることを口頭で正しく伝える為の話し方の指導がされていなかったが、こういう訓練をさせることも大事だと思う。日本語での思考の土台が確立され、日本語をしっかり使いこなすことができなければ、たとえどんなに他の言語が技術的にはできても、本当の意味での国際人になることはできないと信じる。まずは日本語をしっかり身に付けさせる。その上で、英語などの外国語を導入し、それと共に比較文化も取り入れ、英語または他の言語の文化的背景をさまざまな角度から考えさせ理解させる。例えば、「よろしくお願ひします」の文化的な背景は何か、英語にはその発想がないのは何故か、など文化的な背景を考えさせる。時々生徒に AET と日本語で話させて、日本について教える立場に立たせてみるという方法もあると思う。お互いの立場が良く分かると共に、文化的交流も可能であり、何よりも日本の文化や日本語をより理解し誇りに思えるようになる効果があると思う。このように、言語教育には、この「日本語」と、「外国語」、そして「比較文化」の三本立てが必

要だと思う。このような言語教育を通して、言語とその背景を学び理解することができ、自分の文化を客観視することができるようになり、自分の言語や文化をより良いものにすることができる、そうしたすべての機能を果たすことが学校教育の大切な役割だと思う。

参考文献

- 松本青也 「日米文化の特質—文化変形規則 (CTR) をめぐって—」 研究社 1999
「異文化理解の役割」 開隆堂 1987
「異文化理解の必要性」 研究社出版 1987
今井康夫 「アメリカ人と日本人」 創流出版 1990
第一回 国際日本文明会議事務局 「ユダヤ教文化と神道文化の対話」 L.H.陽光出版 2002
Levine, Deena R. et al. 1987. The Culture Puzzle. Prentice-Hall, Inc.
Sakamoto Nancy, and Naotsuka Reiko. 1982. Polite Fiction 金星堂
Hiroko Nishida, and William Gudykurst. 2001 「アメリカ人の生活感覚」 American Communication Patterns 金星堂